様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　3　日現在

機関番号：２５５０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１５２０４４７
研究課題名（和文）日韓両言語の呼称語と述語表現の共起関係に関する容認性判断と性格特性の影響
研究課題名（英文）Effects of acceptability judgments and personality traits on collocations of address terms and predicates in Japanese and Korean
研究代表者
林　ひょん情（LIM HYUNJUNG）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：30412290

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語と韓国語の呼称語と述語表現の多様な共起関係に対する容認性判断に及ぼす個人の性格特性の影響を明らかにすることである。研究の結果、日本語と韓国語の呼称と述語表現の共起関係は、場面と相手によって流動的であることが分かった。また、WLELS（Wong and Law Emotional Intelligence Scale）を用いて性格特性の影響を調べた結果、性格特性は述語表現より呼称語の選択においてより強く影響を及ぼしていることが分かった。

研究成果の概要（英文）：The present study investigated effects of acceptability judgments and personality traits on selection of collocations of address terms and predicates in Japanese and Korean. The results indicated that collocations of address terms and predicates changes depending on scenes and listeners. EI personality traits of WLELS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale) had stronger influence on selection of address terms rather than predicates.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：社会言語学・対照言語学

１．研究開始当初の背景

自称詞、対称詞、他称詞を合わせて呼称語という。呼称語は言語表現としては短いものの、日常生活における言語使用においては、それが使用される社会的人間関係を強く反映している(林・玉岡・深見, 2002; 林, 2003; 林・玉岡, 2003)。従来、日本語と韓国語の敬語研究では、呼称語と述語表現の共起は、待遇の度合いがある程度固定されていると考えるのが一般的であった。ところが、林・玉岡(2004)の韓国の職場での呼称使用の調査では、日本語と韓国語の呼称使用において個人の性格特性が影響することが示された。さらに、林・玉岡・宮岡(2008)では、両言語の呼称語と述語の待遇度が必ずしも一致しない場合があることや、呼称語によっては述語表現の選択が柔軟であることが報告されている。つまり、呼称語と述語表現の共起関

係は、社会的関係ばかりでなく、それを使用する話者の心理的特性やストラテジーなどからの影響も考えられる。つまり、良好な対人関係を維持するために、相手との親密さを保つための配慮あるいは相手の感情を乱さないための配慮の仕方は、社会的・文化的規範の相違のみならず、同じ母語規範を共有する場合であっても個人差がみられることが予想される。

２．研究の目的

本研究は、日本語と韓国語の呼称語と述語表現の多様な共起関係に対する容認性判断に及ぼす個人の性格特性の影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、下記の通りである。

(1)両言語の呼称語と述語待遇表現の共起パターンの使用実態を把握する。
(2)容認性判断から両言語の呼称語と述語表現の共起関係を検討する。
(3)個人の属性・性格特性が容認性判断に及ぼす影響を検証する。

３．研究の方法

(1)両言語の呼称語と述語待遇表現における共起パターンの使用実態

親疎関係・上下関係・性別の組み合わせの異なる対人関係を想定し、発話場面（フォーマル・インフォーマル）に応じて、被験者がそれぞれの相手に対してどのような呼称語を選択し、それと共起する形でどのような述語表現を用いるのかについてアンケート調査を行った。そして、調査結果を参考に、「呼称語と述語表現の共起関係に関する容認制判断」の調査項目を選定した。

(2)容認性判断に関する測定尺度と分析

本研究では、日本人と韓国人の呼称使用および呼称語と述語表現の待遇関係に関する容認度を測定し、それを容認性判断の基準とする。日本語と韓国語の「呼称語と述語表現の共起関係」に関する容認性判断は【表現自体はあるけれど、この相手に向かって（あるいはこの場面で）いうのは適切だ/不適切だ】という判断である。容認性判断は「とても適切である（容認度：+2)」から「全く適切でない（容認度：-2)」の 5 段階とし、容認度がマイナスであれば否定的、プラスであれば肯定的であるという一般指標として使用した。

(3)情動指数(EI)に関する測定尺度と分析

EI の測定には心理学の分野で信頼性と妥当性が検証された WLELS（Wong and Law EI Scale)を適用した。WLELSは16項目からなり、「自己情動評価（Self-emotion Appraisal)」「他者の情動評価（Others-Emotions Appraisal)」「情動の利用（Use of Emotion)」「情動の調整（Regulation of Emotion)」に 4 項目ずつが対応している。日本人と韓国人に対する調査では英語版をもとに作成した日本語版と韓国語版を用いた。日本語版と韓国語版の信頼性については心理学の観点から分析を行った結果、日本人と韓国人に適応できることが検証された。性格特性の尺度は、それぞれ得点化するとともに、呼称と述語表現の共起関係に関する容認性判断（目的変数）を説明する予測変数として用いた。SPSS 社の統計ソフトを使用し、重回帰分析を行った。

４．研究成果

個人の属性・性格特性が容認性判断に及ぼす影響を検証する本研究の研究成果は下記のとおりである。

(1)呼称語（対称詞）と述語表現の使用においては日韓両言語ともに違いが見られ、同じ相手であってもインフォーマルな場面よりはフォーマルな場面でより丁寧な表現を選択する傾向が見られた。一方、呼称語と述語表現の共起関係をみると、従来の日本語と韓国語の敬語法の研究では、呼称語と述語との関係はある程度固定していると考えるのが慣例であった。つまり、呼称語で敬体を使えば、述語にも敬体がくるということである。

しかし、本調査では、場面や相手との関係に応じて待遇レベルに程度の差はあるものの、日韓両言語ともに敬語を控えたり、本来ならば敬語を使うべき人に対して敬語を使わない場合が見られた。つまり、両言語の呼称語は、場面や相手との関係によって多少流動的であり、それぞれの述語と独立して使用でき、規則的な用法から外れ、ある程度戦略的に使われていることが示唆された。このような使用は、日本人に比べ、韓国人においてより顕著であった。

(2) 従来の規範から逸脱した呼称語と述語表現の共起関係と、それに対する容認性判断では、両言語とも力関係（上下関係）より社会的距離（親疎関係）がより強く影響しており、親しい間柄ではかなり容認度が高くなることが分かった。また、呼称語と述語表現の共起関係に関する容認性判断に及ぼす性格特性の影響では、性格特性は述語表現より呼称語の選択においてより強く影響を及ぼしていることが分かった。

また、WLEIS を用いて、韓国人における虚構的呼称使用（非親族に対する親族名称使用）の受容度と性格特性との関係を調べた結

果、同じ社会的規範を共有する母語話者間であっても、先輩に対する親族名称と実名使用には、情動能力の違いが受容度に影響していることを見いだすことができた。とりわけ、親しい先輩に対する親族名称使用には「自己情動評価（Self-emotion Appraisal)」が、あまり親しくない先輩に対する親族名称使用には「情動の利用（Use of Emotion)」が、強く影響していた。具体的には、親しい先輩に対する親族名称使用に対しては、自己情動評価が高い人、つまり自分人の感情をよく理解している人ほど、一方、親しくない先輩に対する親族名称使用に対しては、情動の利用、つまり目標を定め、目標を達成できるように頑張るやる気のある人ほど、より寛容的に受け止める傾向が強いことが分かった。

表1.韓国人母語話者の先輩に対する「親族名称」と「実名」使用の受容度を日から予測する重回帰分析結果

		EI (Emotional Intelligence)					受容度		
呼称	関係	SEA (Self-emotion Appraisal)	OEA (Others-emotion Appraisal)	UOE (Use of Emotion)	ROE (Regulation of Emotion)	R^2	平均	標準偏差	n
親族名称	親しい異性の先輩	.283**				R^2=.086	1.05	0.94	161
	親しい同性の先輩	.355***				R^2=.143	0.84	1.06	161
	あまり親しくない異性の先輩			.185*		R^2=.057	0.30	1.15	161
	あまり親しくない同性の先輩			.255**		R^2=.082	0.18	1.17	161
実名	親しい異性の先輩			-.220*		R^2=.046	-0.97	0.95	159
	親しい同性の先輩						-0.85	1.02	160
	あまり親しくない異性の先輩						-0.77	1.09	159
	あまり親しくない同性の先輩						-0.65	1.15	158

注1:*p<.05. **p<.01. ***p<.001.
注2:網掛けしたセルの数値は標準偏回帰係数
注3:平均の値は＋2から－2までの変数で、＋は親族名称や実名の使用が適切であるとの判断であり、－は適切でないとの判断である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 24 件）

①魏志珍・玉岡賀津雄・大和祐子（印刷中）．談話構造における視点の統一度が日本語テキストの読処理に及ぼす影響．Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Languages Sciences. 査読有.

②Fukuda, E., Saklofske, D. H., Tamaoka, K., & Lim, H.(2012). Factor structure of the Korean version of Wong and Law's emotional intelligence scale. Assessment, 19(1). 3-7. 査読有 http://asm.sagepub.com/content/19/1/3

③Tamaoka, K., Kiyama, S., & Chu, X.-J. (2012). How do native Chinese speakers learning Japanese as a second language understand Japanese kanji homophones? Writing Systems Research. 査読有

④林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生(2011). 否定によって日本語の行為要求疑問文はより丁寧になるのか. 日本學報, 86.143-153. 査読有

⑤林炫情・李在鎬・黄晸煖・浅尾仁彦(2011). 韓国語学習者作文コーパス（KC Corpus）と韓国語教育への活用. 山口県立大学学術情報[大学院論集], 3. 43-51. 査読無

⑥玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞・林炫情(2011). 韓国語を母語とする日本語学習者の語彙知識がオノマトペの習得に与える影響. 言語教育評価研究, 2. 36－41. 査読有

⑦宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘(2011). 日本語語彙テストの開発と信頼性：中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価. 広島経済大学研究論集, 34(1). 1-18. 査読無

⑧木山幸子・玉岡賀津雄・趙萍（2011). 外国語としての日本語（JFL）の語用論的能力に関わる基礎的言語知識: 中国語を母語とする日本語学習者を例に. 言語教育評価研究, 2, 2-14. 査読有

⑨田島ますみ・佐藤尚子・深田淳・玉岡賀津雄（2011). 記述式試験解答に対する答案としての評価と日本語力からの評価: 語彙力を中心に. リメディアル教育研究, 6(1). 査読有

⑩Fukuda, E., Saklofske, D. H.., Tamaoka, K., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2011). Factor structure of Japanese versions of two emotional intelligence scales. International Journal of Testing, 11, 71-92. 査読有

⑪林炫情・玉岡賀津雄(2010). 韓国語の行為要求型表現とその否定表現の丁寧度に関する研究. 山口県立大学学術情報[国際学部紀要 16], 3. 11-23. 査読無

⑫林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞(2010). 丁寧度判定で測定したポライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析. 日本文化學報, 47. 101-115. 査読有

⑬林炫情(2010). 韓国語学習者作文（KC Corpus）と韓国語教育への活用.第 4 回山口県立大学学術研究会予稿集. 7－1. 査読無

⑭林炫情(2010). 非母語話者として「日本語を学ぶ」から「日本語を教える」へ―学習者の視点を活かした言語研究と実践教育を目指す―. 大学日本語教員養成課程研究協議会論集, 4. 73-81. 査読無

⑮李在鎬・林炫情・浅尾仁彦・曺美庚(2010). 韓国語学習者作文コーパス（KC Corpus）について. 朝鮮語教育-理論と実践, 5. 134-137. 査読無

⑯Takefuta, Junko, Mikyung Cho, Hyunjung Lim, Jin Kim(2010). Development of a

Korean Vocabulary Courseware. 36th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo. 45. 査読有

⑰Tamaoka, K., Lim, H.J., Miyaoka, Y. & Kiyama, S. (2010). Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. Journal of Asian Pacific Communication,20. 23-45. 査読有

⑱林炫情・玉岡賀津雄(2009). 韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」と「実名」の使用に関する適切度を決める諸要因. ことばの科学, 22. 137-149. 査読無

⑲林炫情・玉岡賀津雄・李在鎬(2009). 韓国語のオノマトペと動詞の共起パターンに関するコーパスとヒトの言語産出の比較研究. 日本言語学会第 139 回大会予稿集. 366－371. 査読有

⑳宮岡弥生・玉岡 賀津雄・林炫情・池映任(2009). 韓国語を母語とする日本語学習者による漢字の書き取りに関する研究-学習者の語彙力と漢字が含まれる単語の使用頻度の影響-. 日本語科学, 25, 119-130. 査読有

㉑李在鎬・林炫情・浅尾仁彦・曺美庚(2009). 韓国語学習者作文コーパス (KC Corpus) について. 朝鮮語教育研究会 10 周年記念大会予稿集. 査読無

㉒竹蓋順子, 曺美庚, 林炫情, 金眞(2009). 韓国語コミュニケーション能力養成のための語彙学習用 Web 教材の開発. 日本教育工学会第 25 回全国大会予稿集. 641-642. 査読有

㉓Kiyama, S., Tamaoka, K., Takatori, Y., & Lim, H.(2009). Mechanism of multiple factors influencing responses to accusation among people of Japan, Korea, and the United States. 日本言語学会第 139 回大会予稿集. 204－209. 査読有

㉔Tamaoka, K., Ihara, M., Tadao M., & Lim H. (2009). Effects of first-element phonological-length and etymological-type features on sequential voicing (rendaku) of second elements. Journal of Japanese Linguistics, 25. 17-38. 査読有

〔学会発表〕(計 21 件)

①林炫情. 決定木分析を使った語用論研究. 名古屋大学国際言語研究科日本語教育学講座・言語科学会の共催におけるワークショップ. 名古屋大学. 2012 年 1 月 20 日.

②時本真吾・宮岡弥生・時本楠緒子・高濱祥子. 脳波の大域的同期に観る語用論的推論の神経基盤. 日本基礎心理学会第 30 回大会. 慶応義塾大学. 2011 年 12 月 3 日.

③Tokimoto, S., Miyaoka, Y., Tokimoto, N., & Takahama, S. EEG coherence in comprehension of communicative intention: Deduction and abduction. The 34th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society. パシフィコ横浜, 神奈川. 2011 年 9 月 14 日－17 日.

④邢ギョウ婧・ 玉岡賀津雄・早川杏子. 助詞の使い方が誤り易い文の理解に関する中国人および韓国人日本語学習者の比較研究. 世界日語教育世界大会. 天津外国語大学, 中国. 2011 年 8 月 20 日.

⑤大和祐子・玉岡賀津雄. 中国語母語話者と韓国語母語話者の日本語テキストの読み処理における母語の言語的類似性の影響. 世界日語教育世界大会. 天津外国語大学, 中国. 2011 年 8 月 20 日.

⑥玉岡賀津雄. アクセントの認知と聴解―日本人英語学習者による英単語の強弱アクセントの知覚と聴解の関係. 福井県国際交流協会専門研修講座. 福井県立国際交流会館. 2011 年 2 月 19 日.

⑦宮岡弥生・時本真吾. 事象関連電位に観る敬語規則－尊敬語と謙譲語－. 日本言語学会第 141 回大会. 東北大学. 2010 年 11 月 27 日.

⑧朴ソンジュ・玉岡賀津雄・李在鎬. 韓国語漢字語の-hada 付加による動詞および形容詞化の動作性アスペクトによる予測. 日本言語学会第 141 回大会. 東北大学. 2010 年 11 月 27 日.

⑨Takefuta, Junko, Mikyung Cho, Hyunjung Lim, Jin Kim. Development of a Korean Vocabulary Courseware . 36th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo. Aichi Industry and Labor Center. 2010 年 11 月 20 日.

⑩玉岡賀津雄. 中国語を母語とする日本語学習者の文処理のメカニズム. 第四回中日韓日本言語文化研究国際フォーラム. 大連大学 (中国). 2010 年 10 月 23 日.

⑪ Mutsuko Ihara, Katsuo Tamaoka, & Hyunjung Lim. Phonetic and Phonological Effects in Japanese Sequential Voicing. Phonlex 2010. tiendra à l'Université, (フランス). 2010 年 9 月 7 日.

⑫Miyaoka, Y. & Tokimoto, S. Neurophysiological base of Japanese honorific expressions: Human relationship in language use. Neuro2010 (第 33 回日本神経科学大会、第 53 回日本神経化学会大会および第 20 回日本神経回路学会大会合同大会). 神戸コンベンションセンター. 2010 年 9 月 4 日.

⑬玉岡賀津雄. 漢字語の認知処理のメカニズ

ム.第 29 回 JSL 漢字学習研究会.名古屋大学. 2010 年 8 月 21 日.

⑭宮岡弥生・時本真吾. 日本語の敬語処理過程が惹起する事象関連電位.包括型脳科学研究推進支援ネットワーク・夏のワークショップ. 札幌芸文館. 2010 年 7 月 29 日.

⑮Tamaoka, K.,, Kiyama, S., & Chu, X. Influence of lexical and grammatical knowledge on acquisition of the ability to distinguish Japanese homophones by native Chinese speakers learning Japanese.言語科学会第 11 回年次国際大会. 電気通信大学. 2010 年 6 月 27 日.

⑯林炫情. 韓国語学習者作文コーパス（KC Corpus）とその活用方法について. 韓国学研究会（第 13 回研究会）. 広島大学. 2010 年 6 月 26 日.

⑰魏志珍・玉岡賀津雄・大和祐. 日本語のテキスト処理における視点の統一性の影響. 日本言語学会第 140 回大会. 筑波大学. 2010 年 6 月 19 日.

⑱Kiyama, S., & Tamaoka, K. How do Japanese native speakers alter their responses depending on interlocutor ’ s contradictive attitudes?. The 18th International Conference on Pragmatics and Language Learning. Kobe University. 2010 年 6 月 17 日.

⑲大和祐子・玉岡賀津雄・初相娟. 中国人日本語学習者のテキストのオンライン読みにおける語彙と文法の知識の影響. 2010 年度日本語教育学会春季大会. 早稲田大学. 2010 年 5 月 23 日.

⑳KIYAMA, S., TAMAOKA, K., TAKAMORI, Y., & LIM, H. Mechanism of multiple-factors response to accusation by people of Japan, Korea and the United States. 日本言語学会第 139 回大会. 神戸大学. 2009 年 11 月 28 日.

㉑林炫情.非母語話者として『日本語を学ぶ』から『日本語を教える』へ. 大養協第 36 回大会. 九州大学. 2009 年 10 月 9 日.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
林　ひょん情（LIM HYUNJUNG）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：３０４１２２９０

(2)研究分担者
玉岡　賀津雄（TAMAOKA KATSUO）
名古屋大学・大学院国際言語文化研究・教授
研究者番号：７０２２７２６３
宮岡　弥生（MIYAOKA YAYOI）
広島経済大学・経済学部・教授
研究者番号：１０３５１９７５

(3)連携研究者